# OCHADAI GAZETTE

お茶の水女子大学学報　第237号　2013年7月13日

OCHADAI GAZETTE Summer, 2013

写真：杉井 昭子（理学部生物学科３年）

## 自らの知を力として

## CONTENTS

### TOPICS


平成25年度入学式 …… 1-2
学長告辞

学生のアクティビティ …… 3-4

教員紹介 …… 5
● 三宅 亮介先生
（人間文化創成科学研究科自然・応用科学系）

卒業生紹介 …… 6
● 藤倉 尚子さん（文教育学部言語文化学科卒業）

附属学校園からのお知らせ …… 7-8

キャンパス点描 …… 9-10
● 高校教員等(高校・予備校)向けオープンキャンパスを開催しました。
● みがかずば奨学金授与式及び学部生成績優秀者奨学金授与式を挙行
● 桜蔭会研究奨励賞授与式及び大学院博士後期課程研究奨励賞授与式を挙行


お茶の水女子大学
Ochanomizu University

# 平成 25 年度入学式
## 学長告辞

新入生の皆様、入学おめでとうございます。

ご家族はじめ関係の皆様に謹んでご入学のお祝いを申し上げます。

また、ご来賓の皆様には、ご臨席いただきまして心から感謝申し上げます。

今年度、516 名の新入生をお迎えし、皆様とともに、お茶の水女子大学の歴史に新たな1ページを記すことを嬉しく思います。

お茶の水女子大学では、グローバルに活躍できる女性リーダーの育成に、今最も力を入れています。それは、国際性を身につけるための教育と、リーダーシップ教育の二つの要素からなります。

前者については、昨年度、文部科学省の「グローバル人材育成推進事業」に採択され、それを機に国際化教育の体制を整備し強化しています。この事業を全学的に展開している国立大学は、お茶の水女子大学を含めて全国で四大学のみです。本学では、語学教育を強化するとともに、学生が積極的に海外経験できるように留学制度を拡大させています。

また、リーダーシップ教育は国立の女子大学の重要な役割であると考えています。それは、リーダーを目指す人のための教育というだけでなく、将来リーダーという役割を課せられた時に備えての教育といってよいかもしれません。多くの場合、自らが希望してリーダーに成るというよりむしろ周囲から求められるように思うからです。

そこで、本学のリーダーシップ教育では、「知性」、「心遣い」、「しなやかな強さ」を理念としています。

高等教育機関で学ぶ者には、確かな知識を身につけ、それを基盤としながら、新たな知を追求することがまず必要です。その上でさらに他者への配慮ができ、自信をもって、多様な在り方や考え方に対処できる力を身につけてほしいと考えています。

国際的な場面で活動する場合にも、リーダーシップを発揮する際にも、他者と共に在ることを前提に、それぞれが、状況に応じて、何をどう考え、如何に振舞うか、そしてこれらを適切に判断できる知的能力を身につけることが大学時代になすべき重要なことであると思います。

ところで、今とくに女性の社会的活躍が強く期待されています。それは、一つには、国際的にみて、日本では女性が意思決定過程に関与している割合が著しく低いという事実に基づくものです。管理職に占める女性の割合は 10%台にとどまっています。女性の大学進学率が現在 45%を超え、10 年前には既に 30%に達していたことを考えても、この割合は低いといわざるを得ません。そこで国は 2020 年までに、女性が指導的地位に占める割合を 30%にするという数値目標を設定しました。この数値は、女性の大学進学率から判断しても、達成不可能な数字ではないはずです。

そしてお茶の水女子大学は、最も伝統のある国立の女子大学として、これまで以上に女性が将来社会的に活躍するための教育を担う使命があると考えています。それが、リーダーシップ教育であり、グローバル人材育成推進事業です。

女性の社会的活躍が必要とされているもう一つの理由は、数値的な問題以上に、女性の活躍が、社会に新しい視点を加え社会の多様化を促し、社会を活性化させ社会に豊かさをもたらすきっかけになるという期待からでもあります。

本学の学部教育では、社会的活動の要となる知識の基礎や基盤を修得するための教育改革を実行してきました。それは、「21 世紀型文理融合リベラルアーツ教育」と「複数プログラム選択履修制度」です。文系理系という学問の区別を超える新たなリベラルアーツ教育によって、具体的な問題を多角的に分析する手法を学び、その上で、学生各自が主体的にプログラムを選択することで、専門を深め、隣接する専門分野に触れることが可能な教育システムです。

今年本学を卒業した学生が、「謝辞」の中でこの大学の学部の教育について次のように述べていました。

「お茶の水女子大学のリベラルアーツ科目は、1，2 年次の私にとって、とても魅力的なものでした。各分野の先生方から、学問の面白さや奥深さを教えていただき、また、

学生から多くの刺激を受けました。この時に触れた様々な学問の基礎知識や考え方は、物事を広く見ながら深く考えるという点で、その後の専攻での学びや卒業論文作成の際に、私を大いに助けてくれました。」

本学の教育方針について学生がこのような感想を持って卒業されたことは大きな歓びです。

今、私たちを取り巻く課題は複雑であり、それに対処するためには、広く複眼的な視点と同時に深く確かな専門的知識が必要です。皆様がこの大学での学びを通して、それぞれに新しい観点を獲得し、鋭い分析能力と、柔軟で的確に判断する力を練磨してほしいと思います。

本学には次のような日本で最も古い校歌がありますが、この歌には本学の教育の基本的な指針が示されています。それは、

みがかずば　玉もかがみも　なにかせん
　　学びの道も　かくこそありけれ

というものです。

本学は、今から 138 年前に、国によって設置された東京女子師範学校を前身とする女性のための教育機関です。創設時の校舎は現在の御茶ノ水駅近くの湯島にありました。当時「お茶の水の学校」と呼ばれていたことが、現在のお茶の水女子大学の名前の由来といわれています。湯島の校舎は 1923 年の関東大震災で焼失し、その 9 年後(1932 年)、今からおよそ 80 年前にこの地に新たに建設されたのが大学の本館です。

こうした経緯から、この講堂がある大学本館は耐震性に優れ、また不燃性を考慮した鉄筋コンクリート造りになっています。また、外壁には当時流行のスクラッチタイルが使われ、建物の入り口には、国会議事堂の入口の床と同じデザインで、質の良い国産の大理石が敷かれています。このことは本学に対する社会的期待を意味しているともいえますし、この期待に本学は応え続けてきました。

正門、附属幼稚園の建物、この本館と講堂は、国の登録有形文化財に指定されていますが、とくに「徽音堂」と名付けられたこの講堂は、本学での「学び」を象徴する空間であり、附属学校から大学院まで、学ぶことを志す多くの人々を受け入れ、そして社会へと新たな歩みを進める起点にもなっています。

大学での「学び」は、単に知識を享受するだけではなく、知を創造することを求めます。「知は力である」あるいは「人間の知識と力はひとつである」ともいわれますが、知識を力となすために、私たちには物事を根本から問い直す姿勢も必要です。確かな知識を基盤とし、その上で既存の知識を問い直すこと、そのために多様なものの見方を身につけること、そして新たな知を創りあげること、これが大学での学びの姿勢です。

この大学で学ぶ人々には、社会の動きに対して敏感であってほしいと思っていますが、それは、この大学に寄せられている期待に応えるためでもあり、またそれ以上に、皆様がそれぞれに、「自らの知を力として」社会に発信し社会をリードすることが真に豊かな社会を築くことにつながると考えるからです。

今日から皆様がこのキャンパスで豊かな学生生活を過ごされ、そして、知を鍛え磨き、知的な力を備えた人間として成長されることを心から期待しています。

重ねて皆様のご入学をお祝いし、告辞といたします。
まことにおめでとうございます。

平成 25 年 4 月 4 日

お茶の水女子大学長
羽入　佐和子

# 平成 25 年度入学式
## 学長告辞

# 学生のアクティビティ

お茶の水女子大学の学生は授業以外にも様々な場所で様々な活動をしています。
今回はその中でも「SCC-RA(新寮レジデント・アシスタント)」、「JOYnt TEA time」、「ボランティア活動」を紹介します。

## SCC-RA(新寮レジデント・アシスタント)の活動

**今年度より、SCC-RA(新寮レジデント・アシスタント)制度が新しく発足しました。この制度は、学部1年次から2年間在寮経験があり、SCCの運営に積極的に協力する学部3年生をSCC-RAに任命し、その活動を支援するために奨学金を支給するものです。SCC-RAは1、2年生の寮生の相談に乗ったり、学修プログラム、交流プログラム等の企画・運営を、大学・寮生と連携しながら行います。SCC-RAに就任した4名に意気込みと今の気持ちを聞きました。**

学修プログラム委員会

### 2年間の生活を通して

振り返ってみると、2年間SCCで生活したことが自分の成長と大きく関わっているように思います。1年目で初めて顔を合わせる同級生や先輩と共に暮らし、協調性や共同生活の難しさ、多様な文化・習慣を学びました。2年目では、頼る先輩方がいない中での、大学や東京の生活に関して何も分からない後輩達を引っ張っていかなければならない状況が、私の責任感を強くさせました。

また成長だけでなく、SCCは一生ものの出会いを与えてくれました。SCCでは違う学部学科の子達と交流できるので、学科内だけでは得られない知識や刺激が得られ、貴重な経験ができました。また、RAの皆は共にSCCを支えていくチームメイトというだけの存在だけではなく、悩みや愚痴も言い合える素晴らしい親友です。

SCCで暮らすことで一人暮らしや他の寮ではできない事を沢山経験することができ、この寮を大学生活の拠点にできたことをとてもよかったと思っています。これからもRAの仲間と協力しながら、とてもお世話になったSCCに恩返しをし、後輩達を支えていきたいと思います。（文教育学部人文科学科　能村悠里）

### 2年間を振り返って

私がSCCに入寮してから、2年が経ちました。この2年間を振り返ってみると、私の帰る家はSCCでなくてはならなかったという結論に達します。この寮で過ごすことによってたくさんの人と出会い、時間を共有することでかけがえのない経験をすることができました。学修プログラムでの講演・発表、寮祭での他ハウスとの交流、自主企画としてのハウスでの企画、そして2年生時の寮の運営。どれも、私にとっては初めてのことばかりでした。このようなことを通して、ハウスメイトをはじめとした寮生との交流が生まれ、自分の価値観や生活習慣を客観的に見ることができるようになり、「共生」するということの楽しさと難しさ両方を肌で感じることができました。

そして何よりも、SCCに入って本当に良かったと感じることは、今でも仲良くしてくれる友達や先輩・後輩と出会えたことです。皆、所属や興味や出身はバラバラですが、SCCで共に生活したことで、お互いのことをよく知っている家族のような関係が生まれました。

これからはRAとして、寮生が住んでいることを誇れるようなSCCにするためにサポートをしていきたいです。

（文教育学部言語文化学科　三次好華）

### RAへの意気込み

「やり残したことがある」というのが、RAになりたかった理由です。昨年も、OCHADAI GAZETTEにお茶大SCCのことを採り上げていただきましたが、そのとき、私はSCCのイベントについて書かせていただきました。SCCでは、さまざまなイベントが用意されていたり、企画・運営されていたりしていますが、いずれも発展段階にあります。共生とはそもそも何なのか、寮生がより多くの寮生と交流し学ぶためには何をすべきか、などの問題はもちろん、企画されたイベントが寮生の負担になってはならないし、寮生が満足するものにしなければならないという課題もあります。2年生のとき、寮生協議委員会の一員として、各イベントをどのように行っていくかを熱く議論し続けていました。何度も何度も話し合い、試しましたが、結局、最善策にはたどり着けなかったと思います。そこで、RAとなり、1・2年生のサポートをしつつ、今後のSCCをより快適かつ学びのある寮にできればいいと思いました。そして、RAとなり、3か月が経ちました。寮の現状とシステムの差異を鑑みて何点かの変革をしたり、RAとしてできる企画をしたり、鋭意活動中です。今なお、さまざまな葛藤や課題がありますが、その一つ一つに真摯に向き合っていきたいと思っています。

（文教育学部人文科学科　越智由紀子）

### RAへの意気込み

私がRAとして一番やりたいことは、SCCの寮生との架け橋になることです。これまでSCCで暮らした経験を生かして、後輩たちが困っていることに相談にのったり、対処することができたら、SCCはもっともっと住みやすく楽しい寮になるのではないかと思います。お茶大の中では誰も経験したことのないこの制度を、どのようにして作り上げていくかは私たち次第です。これから苦労することも多いと思いますが、同じRAのメンバーと力を合わせて乗り越えていきたいと思います。そして自分がこの寮でやりたいと思ったことにどんどんと挑戦していきたいです。私にとってこの寮で暮らしてきた2年間はあまりに快適で楽しく、「もう1年住むことができるのなら住みたい」と思ったのがRAに応募したきっかけでした。今この寮に住んでいる後輩たちが卒寮するときに、同じように感じてもらえたらいいなと思っています。（文教育学部芸術・表現行動学科　高瑞貴）

自主企画委員会

# JOYnt TEA time

5月27日（月）の17時から19時にマルシェで「JOYnt TEA time」という交流会を自治会とSTUDY FOR TWOの共催で行いました。お茶大で社会貢献に関わる活動をしている団体同士のつながりをつくり活動を活発にしたいという思いから企画し、当日は様々な学年・学部から30名弱が参加しました。はじめに参加者同士で自己紹介をした後、STUDY FOR TWO・オークンチュラン・夢のつばさプロジェクト・ほっとtea・共に生きるスタディーグループの5団体から説明を聞きました。その後食事を取りながら興味を持った団体から話を聞いたり、いくつかの団体で一緒にイベントを行うことについて話したりする時間を持ちました。各団体がやっている活動は異なりますが、同じような分野に関心のある人が集まったからかとても会話がはずんでいました。2時間弱という短い時間でしたが参加者からは「名前だけ聞いたことのある団体の活動内容がわかった。」・「他の団体とのつながりができた。」などの声を聞くことができました。「JOYnt TEA time」に参加してくださった団体・個人の皆様ありがとうございました。交流会でできたつながりを生かし、このような機会を定期的に持つことでお茶大で様々な団体や個人が活発に活動していくことを願っています。

お料理を囲んでの交流

団体紹介

また今回は社会貢献に関する団体・興味のある個人を対象とした交流会でしたが、自治会としては今後もより多くの学生に参加してもらえるような講演会などのイベントを企画していく予定です。ぜひ積極的にご参加ください。

（文責　文教育学部人間社会科学科　柳下明莉）

# 陸前高田市米崎小学校仮設住宅自治会の写真展に参加しました

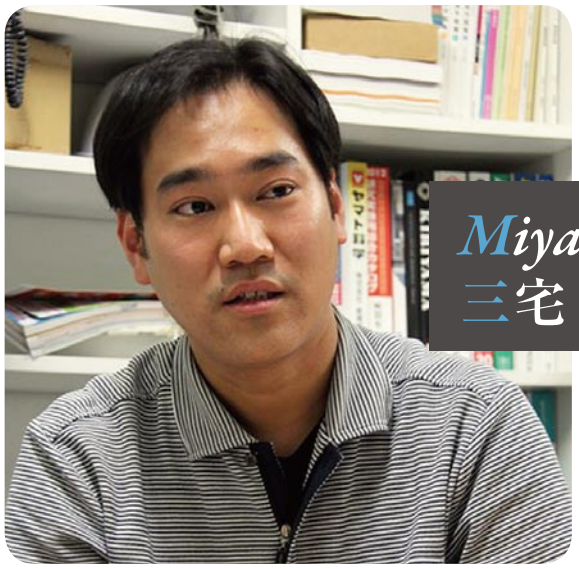
2013年6月9日（日）に文教育学部の学生5名が、東日本大震災で大きな被害を受けた岩手県陸前高田市で、震災復興の取り組みとして企画された写真展にボランティアとして参加しました（写真左）。写真展は、米崎小学校仮設住宅自治会・女性会の主催によるもので、震災から2年間の生活をつづった3,000枚の写真を展示、希望の写真をプリントして配布しました。

グローバル文化学環では、陸前高田市米崎小学校仮設住宅で、2011年10月から復興支援の学生ボランティア実習を継続して実施しており、今回の参加は8回目のものになります。「お茶っこカフェ」とよぶイベントをはじめ2年間のボランティア活動の様子もポスターをつくって掲示しました（写真右）。

（文責　広報チーム）

# 教員紹介

今回は、人間文化創成科学研究科　自然・応用科学系助教の三宅亮介先生をご紹介します。
三宅先生は、大学院では理学専攻　化学・生物化学コース、また学部では理学部化学科ご所属です。



## デザインして物を創りたい

*Miyake Ryosuke*
三宅　亮介

### Q. ご出身、ご経歴などについて教えてください

出身は京都の西陣。平安京内裏の上に住み、二条城の隣にある中学校と東寺の境内にある高校に通うという世界遺産に囲まれた環境の中で育ちました。東京大学理科Ⅰ類から東京大学理学部化学科へ進学し、そのまま大学院理学研究科化学専攻に進み、博士を取得しました。横浜市立大学国際総合科学部の特任助教を経て、2010年7月にお茶の水女子大学に来ました。趣味は、絵を描くこと、テニス、散歩などです。

### Q. なぜ化学を専攻されたのですか

小学校高学年のころは、バイオテクノロジーの学者か医者になりたいと思っていました。高校1年生の時に化学の成績が悪いと先生に言われたことが悔しくて一生懸命勉強した結果、成績も上がり、化学で勝負できるという自信を持つようになりました。大学を受験する時には、化学の研究者になろうと思っていました。真理や原理を探求することに惹かれ、理学部化学科に進学しました。研究室を見学に行った際に、先生がDNAの中に例えば、金、銀、銅を1個ずつ並べてみたりできる、分子電線をつくってみたいという夢を楽しそうに語られていました。それに強く共感して、自分も一緒に夢を追いたいと思ったのが、今の研究分野に進んだきっかけです。

### Q. 学生時代から現在までのご経験について教えてください

錯体化学という分野で金属錯体（金属と有機物を組み合わせた化合物）を作って、その性質や特性を調べています。

学生の時は、異なる物質を混ぜて溶液中で自己集合させることにより、新たな機能をもつ物質を生み出そうということをしていました。修士課程までは人工DNAを、博士課程からはペプチドに金属を並べることなどをいろいろ試みましたが、なかなか結果が出ず、辛い時期を過ごしました。博士課程4年目に初めてペプチドと金属をつなげて新しい環状錯体を作る事ができて、学位を取得しました。横浜市立大学では、金属錯体がつくる結晶中の空間に着目し、分子レベルでの構造変化がどのように物性変化につながるのかを構造解析と様々な分析手法を用いて研究していました。例えば、結晶中の空間にガスが包接した構造を単結晶X線構造解析などによって詳細に調べることで、ガス吸着現象を説明することなどを目指していました。その過程で、自分自身で必要な装置を作り、工夫する事を学びました。今も研究に必要な装置を良く自作しますが、その時の経験が活かされています。

### Q. 海外にいったご経験はありますか?

博士課程の時には、2ヶ月間の留学でドイツのエアランゲン大学に行き、フラーレンの合成等を行いました。海外に出て、その国の良い面、悪い面を知る事は、自分の国や自分の弱みと強みを知ることにつながります。世界の中で自分がどうして行けば良いかを考える貴重な経験になりました。昨年は、若手派遣の制度で、スペインのジローナ大学に行ってきました。若い研究者お一人で、小さな大学におられながら素晴らしい研究をどのようにして進めておられるのかに大変興味がありました。行ってみると、学生達が自発的に考えながらお互いの良い所を引き出している素晴らしい研究室でした。学ぶことが多く、大変充実した2ヶ月間を過ごす事ができました。

### Q. 現在の研究内容について教えてください

新しい物をデザインして作りたいというのがあります。そのために、まず、性質や特性をデザインするためのルールを読み解いていきたいと思っています。新しい化合物を作り、その化合物が示す性質の由来をできる限り詳細に調べることを積み重ねて達成しようと考えています。今は、主に、形状に応じてさまざまな特性を示す小さな空間に着目して研究を展開すべく、空間をもつ種々の金属錯体の合成を行っています。最近の例ですと、ペプチド環状錯体が、結晶状態で周りの湿度や温度による結晶構造の変化を段階的に追える良いモチーフであることが分かりました。対アニオンを変えることで、結晶中で環状錯体の積み重なり方が変わり、様々な種類の空間をつくることもできます。今後、この構造変換を詳しく調べることで機能の切り替えなどに重要な構造変化について理解を深めて行ければと考えています。また、例えばガス吸着のスイッチングなど、構造変化する特性を元にした機能へ展開もしていきたいです。

### Q. お茶大生へ向けてのメッセージをお願いします

お茶大生は、真面目で気配りができ、コミュニケーション力に優れていると思います。良い学生に恵まれ幸せです。以前は、個性的で挑戦的な人が多いという印象を持っていましたが、最近の学生さんは、自分たちを過小評価しているような気がします。今のままでも良いのですが、殻を破ろうという意識を少し持つだけで、自分の能力をさらに大きく伸ばす事ができるのではないでしょうか。そして、自信を持って、もっと挑戦してほしいと思います。また、そのためには基礎が大事になると思います。基礎的な事を積み上げていくことで挑戦に向けた自信や実力を蓄えて行ってください。

自分自身も挑戦する気持ちを持ち続けて頑張っていきたいと思っています。

文責：近藤るみ
（大学院人間文化創成科学研究科
自然・応用科学系講師）

# 卒業生紹介

## 辞書を編み、文化を紡ぐ　～ようこそ、古文の世界へ～

*Fujikura Hisako*
**藤倉 尚子**

株式会社旺文社　ブック事業部
国漢辞書グループ

2004年お茶の水女子大学文教育学部言語文化学科日本語・日本文学コース卒業。2006年お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士前期課程言語文化専攻日本語日本文学コース修了。2006年旺文社に入社以来、古語・国語・漢和辞典などの編集に携わっている。

**辞書の編集者と言えば、この春の話題作『舟を編む』（原作：三浦しをん）を思い浮かべる人も多いだろう。15年をかけて一冊の辞書をつくる話だが、実際、新刊なら約10年、改訂版でも3年前後を要するとされるのが辞書の世界である。今回は、辞書の世界で日々言葉を「編む」仕事に携わる卒業生に登場いただいた。**

### 古文の世界に魅せられて

「高校生の時から私の夢は『堤中納言物語』の作者を知ることでした」

古文の授業が楽しくて仕方がなかったという彼女を魅了したのが平安時代後期の短編物語集『堤中納言物語』だった。編者もわからず、一編を除いては作者も不詳のこの作品を研究し、誰が書き、誰が編纂したのかをつきとめたかったのだという。

卒業論文でもこの文献に取り組んだ。しかし、深く踏みこんで初めてわかったのは、新しい文献や資料が発見されない限り、作者も編者も特定することはほぼ不可能だということだった。『堤中納言物語』を生涯の研究テーマにしたいと考えていただけに、この結論にはさすがにショックを受けたものの、自分の進路をあらためて考えるきっかけにもなったようだ。

「高校から大学まで女子校で 10 年間、とても大切に守られた環境でぬくぬくと生きてきたなと思い始めました。特に私のやっている古文は、理系の学問のようにダイレクトに社会に役立つというタイプのものとは少々異なります。好きな古文に関わりながらも、もう少し社会とつながりを持ちたいという気持ちが芽生え始めました」

アカデミックな世界で生きるのも魅力だが、そこだけにとどまらないで世界を拡げてみたくなった藤倉さんは、博士後期課程に進まずに就職するという道を選んだ。目指したのは出版社。古文と関わりのある出版社が非常に少ない状況だったが、教育出版社の旺文社と巡りあった。高校時代に愛用した古語辞典の版元でもあったことから不思議な縁を感じたという。そして入社後、最初の仕事は古語辞典。まさに願ってもない仕事だった。

### 古の文化を語り継ぐために

それからは辞書を読みながら、間違いがないか調べていく日々が続いた。まだ入社したばかり、なにも知らないままに、自分が学んできたことを頼りにしながら辞書を丸々一冊、2 回読み通した。その後も立て続けに計 3 冊の古語辞典の編集に携わった。

なかでもいちばん気に入っているのが、用例の訳を確認する仕事だ。用例は、常に原文にまで遡り原点を探って訳を施す。それには、非常に手間暇がかかり、根気と努力が必要だ。しかし、根っからの古文好きに加え、大学時代にことばの意味を調べるときは辞書や注釈に頼らず、常に膨大な用例を自分で調べて類推し、自分で訳をつけることを徹底され、それが基本のスタイルとして確立していた藤倉さんにはある意味、馴染み深くてなにより楽しい作業となった。

「旺文社の辞書では“ん”の項の最後の頁に、関わった全員の名前が掲載されるんです。初めて載ったときは心から感激しました」という藤倉さん。延々と机に向かって文字を追う日々は、腰も痛くなるし目も疲れるが、その達成感は何物にも代え難かった。

一方で思うのは、辞書の責任だ。「正しい」ことが当然とされる辞書は、少しでも不確かなことがあると多くの読者から指摘する便りが押し寄せる。それは、裏を返せばそれだけ皆が辞書を信頼しているということでもある。その現実を目の当たりにしながら、日々、辞書の重さを実感している。

最近はさらに、「日本の古の文化を次の世代に伝えること」を自らの生涯のテーマだと考え始めた。古文に興味を持つ高校生がますます少なくなっている今、古文と最初で最後の出会いとなる高校時代にその面白さに気づかずに通り過ぎる人があまりにも多いと感じているからだ。

「現代とはまったく違う文化の中に、現代の私たちにも通じる“心”があるということを知ってほしい」と藤倉さん。その一助となるものを実現することが今の目標となっている。

文責：広報チーム

### わたしのオフタイム

昨年から、英会話スクールに通っている。なかには日本文化に興味のある先生もいて、古文について英語でおしゃべりできるのはうれしく、楽しい時間だ。

入社当初から習っている着物の着付けは、もう今では一人できちんと着られるようになった。次は、習字に挑戦したいと思っている。

# 附属学校園からのお知らせ

## 附属高等学校便り

### 創立130周年記念行事

附属高校は昨年創立130周年を迎え、11月23日に記念行事を行いました。

徽音堂に生徒、保護者、卒業生、現・旧教職員ら附属高校関係者約600名が参集して記念式典が行われました。生徒による奏楽(弦楽四重奏)からスタートし、浜谷望校長の式辞に続き、羽入佐和子学長、小林営師PTA会長、横山真一郎教育後援会会長、小林利子作楽会会長より祝辞を賜りました。大学、保護者、教育後援会、卒業生のお立場から、それぞれ附属高校にエールを送っていただいたと感じました。最後に自治会執行部部長白石千織さんが在校生代表として挨拶をしました。

式典に続く記念音楽会では、本校昭和53年卒、世界的に活躍していらっしゃるピアニストの小山京子さんにご登場いただきました。後半は小山さんの夫君でいらっしゃるチェリストの山本祐ノ介氏も加わって下さり、暖かいチェロの音色にピアノの音も重なって、まさに至福のひとときとなりました。

午後は創立130周年記念祝賀会・作楽会設立120周年記念ホームカミングデーでした。祝賀会は高校の体育館で卒業生を中心に関係者約300名が参加して行いました。作楽会の制作になる、「映像で振り返るお茶

記念音楽会：小山京子、山本祐之介ご夫妻のデュエット

祝賀会：青木美稚子さんの独唱、本校音楽科原大介教諭とのデュエット、合唱部生徒、弦楽四重奏

### 萩山郊外園

お茶の水女子大学附属学校園の郊外園は、昭和13年西武鉄道が沿線の繁栄策として東村山市萩山の社有地約1000坪を東京女子師範学校に寄附したことに始まります。翌年には隣接地約6000坪を西武鉄道より借用、さらには正田禎一郎氏他の寄附により、西側の約1300坪を購入しています。昭和16年3月には萩山農園の効率的運用を果たすため、財団法人「生和会」が設立されました。当時の農園の土地は松林や雑木林で、開墾にあたった附属高等女学校の生徒は相当な苦労をしたようです。

現在は、はじめの約1000坪(現在国有地)を小学校、生和会管理の1300坪を幼稚園、中学校、高校で幼児・児童・生徒の勤労教育のための農場として使用しています。高校では1年生全員が5月にサツマイモの苗植えをし、11月に収穫、3月にジャガイモの種芋の植付けをし、2年生の7月に収穫、その間にクラスごとに草取り、追肥、土寄せ等の作業を行うなど、年間10回の農場実習を行っています。収穫物はその場で調理して食べたり、家庭に持ち帰ったり、学校に持ち帰って他の学年の生徒に分けたり、家庭科の実習で食材として使用したりしています。多くの卒業生がこの農場実習を得難い懐かしい体験ととらえてくれているようです。

現在の農場、サツマイモの苗植え

財団法人「生和会」はかつてはお茶の水女子大学学長が理事長を務めていましたが、附属学校部が発足した昭和55年以降は、附属学校部長が理事長、各校園の校長・副校長をはじめ現・旧の教員

昭和 16 年頃の農場、農作業の様子

昭和 16 年頃の農場、器具洗い場、水道は現在と同じ

記念式典：浜谷望校長式辞

高の130年の歴史」の上映や、本校45年卒声楽家の青木美稚子さんの独唱、本校音楽科原大介教諭とのデュエット、合唱部生徒なども加わり、最後は合唱となり大いに盛り上がりました。

祝賀会終了後はホームカミングデー校舎開放ということで、高校校舎で、クラス会、同期会等を行いました。久しぶりの再会に話が弾んだクラスもいくつかあったようです。大勢の卒業生が訪ねてくれる「母校」であり続けたいという思いで1日が終わりました。これら行事と併せて「創立130周年記念誌」を刊行しました。

現在の農場、ジャガイモの草取り

が理事等として運営を行ってきました。平成20年の財団法人法の改正により、土地財産を所有したままでの財団の維持が困難なため、土地他の財産をお茶の水女子大学に寄附し、財団法人「生和会」は解散することとなります。附属学校園にとっては大切な教育の場である郊外園を、今後も附属校園が農場として使用できるよう、大学と相談を進めているところです。

## 附属学校園での出来事　（2013年4月～6月）

### 【いずみナーサリー】

**4月**
- 避難訓練
- 保護者会

**5月**
- 保育参観
- 避難訓練

### 【附属幼稚園】

**4月**
- 始業式
- 入園式
- 5歳児遠足（小石川植物園）
- PTA総会
- 避難訓練
- 誕生会
- 4歳児親子で遊ぶ日
- 五月人形飾り付け

**5月**
- 五月人形学内向け公開
- 子どもの日の集い
- 健康診断
- 親子遠足
- 学内保育公開（5歳児・4歳児）
- 誕生会
- CAP講習会（5歳児保護者）

**6月**
- 親子で遊ぶ日（5歳児・3歳児）
- 教育実習
- 誕生会
- ジャガイモ掘り（5歳児・4歳児）
- 公開保育研究会

### 【附属小学校】

**4月**
- 始業式
- 入学式
- アレルギー児童懇談会
- 新入生を迎える会
- 自学発表会（6年生）
- 通学班別会
- 全国学力・学習状況調査
- 健康診断
- 避難訓練
- 授業参観
- 保護者総会／かがみ会総会
- 教育後援会総会

**5月**
- 委員会活動（5・6年生）
- 小学校運営委員会
- 大地震対応訓練
- たてわり集会
- 郊外園活動（サツマイモ植え3・4年）
- 避難訓練
- 運動会

**6月**
- 衣替え
- 郊外園活動（ジャガイモ掘り1・6年）

### 【附属中学校】

**4月**
- 始業式
- 入学式
- 歓迎会（徽音堂）
- 避難訓練
- 3年生修学旅行
- 2年生理科実習（江ノ島）
- 3年生全国学力調査

**5月**
- 健康診断
- 生徒総会
- PTA総会
- 授業参観週間
- 1年生郊外園（サツマイモ植え付け）

**6月**
- 体育大会
- 1年生保護者会
- 中間テスト
- 3年生郊外園（ジャガイモの収穫）

### 【附属高校】

**4月**
- 入学式
- 始業式・着任式・対面式
- PTA総会
- 教育後援会総会
- 1～3年保護者会
- 避難訓練
- 自治会選挙
- 歓迎会

**5月**
- 健康診断
- 1年学年合宿
- 2年学年合宿
- 3年学力テスト
- 3年校外学習
- 1年農場実習（サツマイモの植え付け）
- 体育祭

**6月**
- 自治会総会

現在の農場、ジャガイモの収穫

# 附属学校園からのお知らせ

# キャンパス点描

## 高校教員等（高校・予備校）向けオープンキャンパスを開催しました。

2013年6月8日（土）、本学として初めて、高校教員等向けオープンキャンパスを開催しました。

初めての開催ということもあり、どれだけの先生方がご参加していただけるか心配をしておりましたが、関東圏のみならず、北は青森県から南は宮崎県まで計５６校の高校より６３名の先生方にご参加いただきました。

当日は、第一部、第二部、オプショナルツアーで構成されており、第1部では、羽入学長、耳塚教育機構長からの挨拶、加藤広報推進室長からの大学概要説明後、各学部長からの各学部についての紹介、推薦入試における選考の要点等の説明がありました。その後、「AO入試模擬授業」の一部映像公開や、お茶の水女子大学における学生支援制度等についての説明がありました。

## みがかずば奨学金授与式及び学部生成績優秀者奨学金授与式を挙行

2013年5月22日（水）、平成25年度みがかずば奨学金授与式及び、学部生成績優秀者奨学金授与式を挙行しました。

みがかずば奨学金は、お茶の水女子大学へ入学を希望する受験生に対して、入学後の生活の目処をたててもらうことを目的として、平成23年度に設立されたものです。今年度は、入試前に出願し内定を得た者の中から、本学に入学を果たした26名の学部1年生が受奨者となりました。

学部生成績優秀者奨学金は、学部３年に在学する者のうち、1･2年次の成績、人物が特に優秀と認められた者について、これまでの努力を評価し、今後一層の勉学を奨励することを目的として、平成23年度に設立されたものです。今年度は、学部1･2年次から引き続き在学する本学学部３年生（中途に休学期間がない者に限る。）の中から、厳正なる審査の結果、25名の学生が受奨者となりました。

式典では学内教職員臨席のもと、羽入学長から賞状を授与、そして遠藤桜蔭会会長から目録が授与されました。

また、学長及び遠藤会長からお祝いと励ましの言葉がかけられ、各奨学金受奨者の中から1名ずつが、代表として謝辞と今後の学修･学生生活への意気込みについて挨拶を述べました。

学部生成績優秀者奨学金

みがかずば奨学金

第二部は個別相談、歴史資料館及び附属図書館見学があり、こちらには20人以上の先生方がご参加になりました。本学の教職員だけでなく学生へも質問をなさっていました。また、オプショナルツアーでは本学の新寮「お茶大SCC」の見学ツアーとなっており、こちらには4名の先生方が参加されました。

アンケートのご意見等も参考にして、工夫を凝らしたプログラムをご用意し、来年度も引き続き実施いたします。

開催時期が決まりましたら、大学ホームページでお知らせいたします。

## 桜蔭会研究奨励賞授与式及び大学院博士後期課程研究奨励賞授与式を挙行

大学院博士後期課程研究奨励賞

桜蔭会研究奨励賞

2013年5月29日（水）、平成25年度桜蔭会研究奨励賞授与式及び、大学院博士後期課程研究奨励賞授与式を挙行しました。

桜蔭会研究奨励賞は、平成19年度に本学同窓会の桜蔭会の助成により発足し、今年度より一部制度を変更し入学前予約型奨学金となりました。本学学部在学者で、入試前に出願し、プレゼンテーション審査等を経て内定を得た者の中から大学院博士前期課程に進学した学生に送られます。今年度は20名が受賞しました。

大学院博士後期課程研究奨励賞は、大学院生（博士後期課程）奨学基金をもとに今年度より新たに設立した、入学前予約型奨学金です。本学大学院博士前期課程在学者で、入試前に出願し、プレゼンテーション審査等を経て内定を得た者の中から大学院博士後期課程に進学した学生に送られます。今年度は10名が受賞しました。

式典では学内教職員臨席のもと、羽入学長から賞状を授与、そして遠藤桜蔭会会長から目録が授与されました。

また、学長及び遠藤会長からお祝いと励ましの言葉がかけられ、桜蔭会研究奨励賞受賞者及び大学院博士後期課程研究奨励賞受賞者の中から1名ずつが、代表として謝辞と今後の研究への意気込みについて挨拶を述べました。

キャンパス風景
提供:お茶の水女子大学写真部

お茶の水女子大学学報　第 237 号
▽発行日 :2013 年 7 月 13 日
▽発　行 : 国立大学法人お茶の水女子大学
東京都文京区大塚 2-1-1（〒 112-8610）

ご意見・ご感想はこちらまで
学術・情報機構広報チーム
電話　03-5978-5105
FAX　03-5978-5545
E-mail:info@cc.ocha.ac.jp
URL　:http://www.ocha.ac.jp/

本誌、お茶の水女子大学学報「GAZETTE」は、
本学ホームページにも掲載していますので、どうぞご覧ください。

Copyright (C) 2013 Ochanomizu University. All Rights Reserved